

第3章 史跡の概要

第1節 歴史とその概要

第1項 多田銀銅山の歴史

(1) 古代（大仏の産銅伝承から能勢採銅所の設置・支配）

多田銀銅山のはじまりは、奈良時代に遡るとされている。江戸時代の銀山役人秋山良之助による多田銀銅山の歴史の編纂史料（『摂州多田銀銅山濫觴来歴申伝略記』）には、奈良時代に東大寺の大仏鑄造の際に銅を寄進するため、奇妙山神教間歩を採掘したという伝承があると記されている。

また、『扶桑略記』の長暦元年（1037）に「摂津国」から銅を掘り出して献上したと記され（三月一日条）、また銅を7社に「摂津国献銅の上分」を献上したと記されている（八月三日条）。

この記事では、摂津国のどこであるかは定かではないが、『百鍊抄』や『帝王編年記』の長暦元年条に「能勢郡初めて銅を献ず」と記されている。また、『壬生家文書』には、「長暦元年（1037）から間もないうちに能勢採銅所が設置され、三種の土貢（銅・紺青・緑青）を貢進させる供御所として、本格的に採掘が始められた」とある。

採銅所は預（奉行）、権預、案主、預目代の役人が管理運営にあたっていた。採銅所設置当初は、摂津国の国衙から料物を支給され、在郷住民を雇役して採掘していた。その後、弘安2年（1279）から付近の公領や荘園の農民を寄人・徭人に編成して労働力として確保し、採掘させる体制をとった。この体制を確立させることによって、採銅所は周辺の村落に対して支配権を持つこととなった。採銅所は、平安時代末期から太政官の官務家の小槻家（後に壬生家に改姓）が世襲し、採銅所預職は大江家によって継承されてきた。採銅所の位置についてはこれまで場所が特定されていないが、小槻家が建立した余野山の仏照寺の供養願文から、余野山付近と考えられ、現在の野間神社付近と推定されている。（『豊能町史』、『能勢町史』）また、採銅所では三種の土貢のほかに、伊勢神宮の式年遷宮の際の神宝用途料として銅を貢進していた。

(2) 中世（多田院御家人と多田銀銅山）

鎌倉時代中期以降になると、採銅所の支配運営を揺るがす問題が相次ぎ、銅の貢進が滞る事態が生じる。建暦2年（1212）には、採銅所の預職の相続について採銅所の関係者の間で疑義が起り、朝廷に訴える事態が生じた。

13世紀末になると、朝廷の役人から採銅所の運営に対する疑義が朝廷に提出されるようになる。ひとつは採銅に従事していた農民のなかから、採銅所の支配に従わない者が現れ、現地役人と結託して悪党化し、業務を妨害することが起こった。また、一方では、採銅所の役人が銅・紺青などを密売しているとの疑問が起こり、永仁3年（1295）、朝廷の細工所の沙汰人らが採銅所奉行大江益資の旅館を襲い、銭貨、紺青を略奪する事件が起こった。このような出来事から次第に採銅所から朝廷への貢進が滞っていった。また、南北朝の動乱の中で台頭してきた守護や多田院御家人である能勢氏などの採銅所に対する侵略も進んだことから、採銅所の経営はますます苦しくなり、天正5年（1577）に、官務家による能勢採銅所支配はついに解体された。

なお、能勢採銅所関連の史料では、「多田庄内槻並村金山」と記されていることから、少なくとも槻並村一帯は、能勢採銅所の管理下で採掘が行われていたことが明らかである。

(3) 近世（銀山地区の開発）

戦国時代には、多田院御家人の筆頭格として台頭した塩川氏が他の多田院御家人をしたがえ、現在

の川西市域と猪名川町域を中心とした川辺郡域を支配していた。塩川氏は隣接する能勢郡域を支配していた能勢氏とたびたび領地争いを起こしていた。

正確な時期については定かではないが、天正年間前後に塩川氏は豊臣秀吉によってその位置を追われるとともに、塩川氏に加担した多田院御家人たちも知行地を没収された。

豊臣秀吉はこの地を手中に収めたあと、多田銀銅山の開発をすすめた。慶長3年（1598）に豊臣秀吉に運上した蔵納の記録『伏見蔵納目録』には、佐渡金銀山、但馬中瀬金山などの上納とともに摂津多田荘銀山から銀476枚の上納があったと記されている。また、他の石見、因幡、越中の諸銀山と比較しても運上銀が極端に少ないことから、産出量のピークを過ぎているとの見方もある（『猪名川町史』第1巻）。

猪名川町域での江戸時代初期の動向は不明な部分が多く、定かでない。多田院御家人旧家に伝わる『多田雪霜談』には大坂夏の陣の際に、銀山砦の支配をめぐる、近接する上野・広根・猪瀬村が戦場になったと記されているが、『徳川実紀』の記事では大坂夏の陣に際して各地で起こった土豪たちの蜂起という位置づけがされており、その詳細についてはまだわかっていない。

寛文元年（1661）に銀山地区の念力山の大口間歩から良質な鉱脈が発見されたことから、幕府の直山となり、「銀山町」とするとともに、猪名川町のほぼ全域を含む周辺の70余村を「銀山付村」として幕府の直轄下に置いた。翌寛文2年（1662）には代官所とともに銀山町の出入り口4箇所（口固番所（大坂口、滝口、奥山口、田原口））が設置されたが、天和2年（1682）に代官の中村杵右衛門が追放された以後、代官は派遣されず、銀山も幕府の直山から、役所に対して運上金を上納して使用し、収益を許可する請山となった。それ以後、代官所は役所として位置づけを変えながらも、明治2年（1869）に廃止されるまでの間、多田銀銅山と銀山付村の支配を行った。

元禄元年（1688）には、川西市の山下町に山下役所が設置された。以降、銀山役所とともに多田銀銅山の幕府直領の村々に散在する間歩を統括するようになった。また、山元での製錬（山吹）が禁止され、多田銀銅山での製錬は銀山町と山下町の2箇所で行うようになった。これには寛文9年（1669）以降繰り返されてきた役人の減少が起因と考えられる。

10代将軍徳川家治の老中田沼意次は、逼迫した幕府財政を立て直すための政策を取った。特に中国・オランダとの貿易維持の貨幣政策のため、宝暦13年（1763）には鉱山の新規開発と再開発が行われるようになった。多田銀銅山もその対象に入ったようだが、坑内水のため鉱山の再興とまではいかなかったようだ。

なお、多田銀銅山では銀・銅・鉛・白目の産出のほか、緑礬・丹土などの顔料も産出していた。

銀山役所は明治2年（1869）に廃止され、約200年余り続いた代官所（役所）による鉱山管理体制が終焉した。

（4）近代（西洋の製錬技術導入から閉山）

明治時代も引き続き、銀山地区をはじめ多田銀銅山各所で採鉱が行われた。明治5～7年（1872～1874）にフランス人で鉱山技師のコワニエが日本全土で地質鉱物学的な調査を実施し、明治7年に『日本鉱物資源に関する覚書』としてまとめた。そのなかで多田銀銅山は、「殆ど全部が浸水のために約150年来中止せられて、いまでは唯或種の旧式作業によって細々と営んでいる程度である」と記されており、大規模な鉱山運営が行われていなかった。

また、銀山地区の鉱山師宅に残された文書からは、多田銀銅山は官営となった生野銀山などくらべ、西洋の製錬技術の導入が遅れ、鉱山経営に苦心していたことが読み取れる。

明治19年(1886)、齋藤精一がまとめた『兵庫県下鉱山概況』は明治初期から19年(1886)までの多田銀銅山の稼行形態について知ることができる資料である。この資料には、明治初年から10年代まで猪名川町域では、銀山地区や南田原、万善、猪淵地区の鉱山運営を銀山地区やその周辺地域出身の鉱山師・鉱夫らが行っていたこと、明治7年(1874)に大阪の実業家阪井五一が瓢箪間歩などの坑内の水抜きを試みたが失敗し、明治12年(1879)に地元の山師によって再び水抜きが行われたが、失敗したことなどが記されている。

明治18年(1885)以降については、当時の大阪鉱山局などがまとめた「鉱業関係資料」から多田銀銅山での稼行状況を明らかにすることが可能である。これらの記録から、明治19年(1886)には神戸の実業家関戸慶治が銀山および猪淵や川西の国崎などで鉱業権を取得し、稼行を行っていたとの記録が残されている。

ところが明治20年(1887)2月、銀山、南田原をはじめとする多田銀銅山の主要鉱区および平野鉱泉場を、三菱社が「多田鉱山」として買い受けた。当初は吉岡鉱山(堀田連太郎)が多田鉱山を管理した。しかし、多田鉱山の事業展開は行われぬまま、明治22年(1889)10月に平野鉱泉場と一部の借区を残し、見込みのない借区を返上した。また、多田鉱山の借区人名義は平安邦太郎とし、管理は宮崎県の日豊鉱山(後の槇峰鉱山)に移した。その後、明治26年(1893)5月、三菱社は一つの借区になっていた銅山部と銀山部を分離し、見込みのたない銅山部(多田千軒)を、名代人であった平安邦太郎に下げ渡し、銀山部は堀伴成に譲渡した。明治26年(1893)7月の堀伴成の契約書類には、条件付きの無償譲渡であることが明記されている。津和野の堀家は、江戸時代から続く鉱山家で、代々藤十郎を名乗っている。堀伴成は14代目で、すでに家督を堀礼造(15代藤十郎)に譲っていた。

農商務省鉱山局の明治28年(1895)特許採掘一覧では鉱業人名は岩崎久弥であり、明治31年(1898)特許採掘一覧では堀伴成となっている。名義の変更は、この間に行われたのであろう。ただし、鉱山師宅に残された史料では「明治30年代に堀藤十郎が、大阪の商人河野清助を仲介して銀山地区の有力者との間で請負契約を結んだ。」とあるので、堀家の鉱業着手は明治30年(1897)5月以前の可能性がある。採鉱は当初大口、金懸を中心に行われていたが瓢箪旧坑の大鉱脈を発見したため、明治40年(1907)に従来設置していた製錬施設に加えて、大量生産を図るため西洋技術を取り入れた機械選鉱場の建設を計画し、着工した。しかし、第一次世界大戦後の銅価格暴落のため採算が取れず、機械選鉱場は未完成のまま稼働を休止した(明治40年(1907)『本邦鉱業の趨勢』・明治41年(1908)『本邦鉱業の趨勢』)。製錬所稼働休止後も多田鉱山の鉱業権は堀鉱業株式会社が保有していたが、大正12年(1923)に久原鉱業が共同権者となった。その後、名義は昭和16年(1941)に日本鉱業(株)となった。昭和36年(1961)には「多田鉱業所」を設置し、昭和41年(1966)瓢箪旧坑周辺の地下の採掘を行い、昭和48年(1973)に閉山となるまで稼行した。

第2項 銀山地区の歴史

銀山地区の開発については、多田源氏の由緒について記された元禄元年(1891)の刊本『多田五代記』に、天延元年(973)、金瀬太郎が多田の山中より銀を掘り出し源満仲に献上したとある。江戸時代の銀山役人秋山良之助が多田銀銅山の由来について記した『摂州多田銀銅山濫觴来歴申伝略記』、『摂津国多田銀山御役所古来勤方大概』、『摂津国多田銀銅山略伝』などには「天禄元年(970)、金瀬五郎が金懸間歩(または多田山中)より銀を掘り出し源満仲に献上した」という俚諺が紹介され、「このことは多田五代記にも見へたりと云」。または、『奉勤要用帳一』では『銀山濫觴』として、「多

田満仲公御代黄金を掘り出すと多田五代記二有之、黄金と記せしハ銀山可成也」と記述している。『摂津国多田銀山御役所古來勤方大概』には、「北条家之時も多田山中福平間歩、切山間符（歩）等より、銀銅紺青等専ら出産いたし候由」とあり、また、「足利家御時も、多田山中千本八ヶ間歩より銀銅出産専ら繁栄、千本間歩辺人家数百ニ及び寺五ヶ寺あり」と記されていることから鎌倉・室町時代にも銀山地区で採鉱があったと考えられる。また、『高代寺日記』長久2年（1041）二月条では「摂州広根二銅且金青ヲ掘出ス申訴ラル」と記されており、少なくとも11世紀代には猪名川町域において採掘が開始されたと推定される。中世に猪名川町南部地域にいたと考えられる多田院御家人は、少な

表5 多田銀銅山関連年表

時代	西 暦 (和年号)	できごと	主体
奈良	742 (天平14)	奇妙山神教間歩 (川西市域) より東大寺大仏鑄造の銅を寄進 (伝承) …銅山の始まり	
平安	973 (天延元)	金瀬太郎、金懸間歩で採れた銀鉱を源満仲に献上 (伝承) …銀山の始まり	
鎌倉	1211 (建暦元)	能勢郡に採銅所 (「壬生家文書」より) ※「壬生家」とは、国の重要な文書を管理していた家のこと	
安土 桃山	1586 (天正14)	豊臣秀吉、絵師狩野山楽に紺青間歩の採掘権を与える ※紺青とは、鮮やかな青色の顔料のこと	豊臣秀吉
	1588 (天正16)	冷泉為満、多田銀山を見物	
	1573~91 (天正年間) 1583~92 (天正年間後半)	原丹波・淡路が瓢箪間歩の経営に当たる (瓢箪、台所間歩での採掘が盛んになる) 銀山広芝に陣屋を置き、奉行岸嶋伝内・川瀬八兵衛を派遣する	
江戸	1660 (万治3)	銀山町年寄津慶吉兵衛、大口間歩の豊田屋敷で銀の大鉱脈を発見	藩を通じた間接支配
	1661 (寛文元)	中村李右衛門之重が銀山奉行に任せられ、役人65人とともに銀山に着任 銀山町柵内諸間歩が栄え、直山 (幕府直轄鉱山) となる	幕府による 直接支配
	1662 (寛文2)	瓢箪間歩の水抜普請を開始する (総工費は現在の約5億5千万円相当)	
	1664 (寛文4)	代官所設置に伴う諸施設が整備される (建設費は現在の約9千15万円相当)	
	1667 (寛文7)	多田銀銅山出銅高、最高を記録 (現在の約453トン相当)	
	1669 (寛文9)	瓢箪間歩で大鉱脈が発見されるが、水抜普請に失敗	
	1676 (延宝4)	銀山役人の数が22人に減らされる	
	1677 (延宝5)	大雨による大洪水で玄能池が決壊し、多数の間歩に浸水。犠牲者約100人。 前年の大洪水の被害で稼行が困難となり、幕府直営 (直山) から請負稼ぎ (山師経営) となる	役所を経由した 間接支配
	1682 (天和2)	銀山代官中村李右衛門之重、職務不良のため追放・切腹させられる 銀山役人の数が22人から12人に減らされる	
	1683 (天和3)	4ヶ所の口固番所廃止、役所縮小	
	1685 (貞享2)	銀山役人の数が12人から10人に減らされる	
	1688 (元禄元)	銀山役所修復 (実際は役所の縮小) 銀山役人の数が10人から5人に減らされる	
	1692 (元禄5)	山下町 (川西市山下) に役所が設置される (銀山2~3人、山下1~2人、大坂1人)	
	1705 (宝永2)	山吹が廃止され、銀銅の吹所は銀山・山下の2カ所に限定される	
	1721 (享保6)	銀山役人5人、敷廻り5人で役所に詰める 不要となった建具の木材を用いて銀山役所を修復 (実際は縮小)	
1744 (延享元)	銀山、大坂代官の支配となる		
1768 (明和5)	銀山役人3人、敷廻り3人、中間1人で役所に詰める 不要となった建物の木材を用いて銀山役所を修復 (実際は縮小)		
1772 (明和9)	銀山町、人口309人 (男165、女144)、家屋86軒		
1784 (天明4)	夏に平賀源内が多田銀銅山を訪れる		
1808 (文化5)	多田銀銅山、大津代官の支配となる		
1815 (文化12)	この年、多田銀銅山出銅高、史上最低 (現在の約48キロ相当) を記録		
1820 (文政3)	銀山役所の建物他、書物・長持・古絵図・所道具などが焼失		
1830 (天保元)	大津役所からの公費支給により、新役所が竣工		
1840 (天保11)	秋山良之助、銀山役人として着任		
1858 (安政5)	銀山町を含む川辺郡北部一帯の支配が摂津高槻藩に預けられる 山師などの援助を得て銀山役所を修復		
明治	1869 (明治2)	銅山地役人の制、廃止 (銀山役所の終焉)	
	1873 (明治6)	『元鉱山御役所御松下ヶ御願』が出される	鉱山六人衆
	1875~1887 (明治8~20)	地元の山師が神戸の実業家、関戸慶治の援助を受けて稼行する	関戸由義
	1887 (明治20)	三菱鉱業 (株) が多田銀銅山の鉱区を買収	三菱
	1893 (明治26)	三菱鉱業 (株) が堀藤十郎に鉱区を譲渡	
	1895 (明治28)	堀藤十郎が「多田鉱山」として採掘特許を取得	堀藤十郎
1897 (明治30)	堀藤十郎の堀礼造が銀山の鉱山師たちと請負契約を結んで稼行する		
1907 (明治40)	堀藤十郎が多田鉱山に機械選鉱場の設置工事を進めるが、翌年休業		
大正	1923 (大正12)	堀鉱業 (株) と久原鉱業 [後の日本鉱業 (株)] が共同権者となる	堀鉱業 (株) ・久原鉱業
昭和	1957 (昭和32)	日本鉱業 (株) が瓢箪周辺の採鉱により有力な鉱脈を確認する	日本鉱業 (株)
	1961 (昭和36)	日本鉱業 (株) が銀山に日本鉱業 (株) 多田鉱業所を設置する	
	1973 (昭和48)	日本鉱業 (株) 多田鉱業所が閉山し、鉱山としての役割を終える	
平成	2000~2005 (平成12~17)	猪名川町教育委員会が代官所跡遺跡の詳細調査を実施	
	2006~2010 (平成18~22)	猪名川町教育委員会が多田銀銅山遺跡詳細分布調査を実施	
	2011~2013 (平成23~25)	猪名川町教育委員会が多田銀銅山遺跡詳細調査を実施	
	2015 (平成27)	多田銀銅山遺跡銀山地区が国史跡に指定される (全国の鉱山遺跡では8番目、兵庫県では初めての国史跡)	

らず採鉱に関わっていたと考えられる。

天正期には、豊臣秀吉が多田銀銅山を直轄鉱山として、鉱山支配にあたったようだ。『摂州多田銀銅山濫觴来歴申伝略記』や『多田銀銅山略伝』では、銀山地区では16世紀に瓢箪間歩、台所間歩、千石間歩の開発し、採鉱を行ったところ、相当の銀銅の産出があったことから、豊臣秀吉が「銀山町」を設置し多田銀銅山を直轄鉱山として支配したこと、銀山広芝という所に陣屋を設け、岸嶋伝内、川瀬八兵衛兩人を奉行とし、同心、足軽200余人を引き入れて、諸間歩の口を固め全てを取り締っていたという記述が残されている。また、現在でも銀山地区には大坂城の財政を潤すほどの産出量があったといわれる「台所間歩」や、豊臣秀吉の馬印である千成瓢箪を与えられ、間歩口に祀ったといわれる「瓢箪間歩」など豊臣秀吉ゆかりとされる間歩群が残されている。

なお、当時の史料として残されているものでは、天正14年(1586)に豊臣秀吉が絵師狩野山楽に紺青間歩の採掘権を与えたとの記録が残っている。銀山地区には天正14年(1586)付の朱印状の写しが残されている。また、その2年後の天正16年(1588)9月10日には公家の山科言経が、冷泉為満とともに多田見物に出かけたことが記事として残されており、内容からこの時期前後に多田銀銅山の開発が行われたことが推定される。

寛文元年(1661)に銀山地区の念力山の大口間歩から良質な鉱脈が発見されたことから、幕府の直山となり(寛文元年[1661]～天和2年[1682])、「銀山町」とするとともに、猪名川町のほぼ全域を含む周辺の70余村を「銀山付村」として幕府の直轄下に置いた。寛文2年(1662)には代官所とともに銀山町の出入り口4箇所(大坂口、滝口、奥山口、田原口)が設置され、寛文4年(1664)には鉱石産出量のピークを迎えるが、銀山地区の岩盤は粘土質で多くの水を含んでいるため、当時から坑内の水抜き作業に難航したようである。そのため、銀銅の産出量は次第に減少する傾向をみせる。加えて延宝4年(1676)には、大洪水による玄能池の堤防決壊が起こり、続いて延宝7年(1679)の大洪水も銀銅の産出量の減少に拍車をかけたとみられる。

幕末の天保の飢饉の際には、猪名川町北部地域も冷害に見舞われ、稲が不作となるが、田畑が少なく、自給体制が取れない銀山町では食糧に困窮し、文政4年(1821)から天保13年(1842)の間に人口が約50人減少した。この頃に銀山の吹屋は次々に廃止され、慶応2年(1866)には1軒となった。

第3項 多田銀銅山での幕府の鉱山管理体制

『摂津国多田銀山御役所古来勤方大概』(町史第5巻所収)には、多田銀銅山の代官所設置にいたる経緯が詳細に記されている。これによると、万治3年(1660)、銀山町年寄、津慶吉兵衛が幕府に対し、大口間歩の普請を出願し、以前開削した部分を取り明け普請したところ、銀を含む大鉱脈を発見した。

これを契機として寛文元年(1661)に京都代官であった中村杢右衛門が銀山奉行として役人、同心65名とともに着任し、寛文2年(1662)に、代官所の敷地造成と建物の設置とともに役人屋敷、鉱石蔵、牢屋などの諸施設が建設された。またその際に、門、塀、山柵などとともに大坂口、滝口、奥山口、田原口の4つの口固番所が設置され、番所および山柵より内側は、「柵内」として厳重に鉱山管理が行われるようになった。

寛文4年(1664)には、銀銅の産出量が最盛を極めたが、その後、水抜普請の失敗などにより、徐々に産出量が減少したために、寛文9年(1669)以降、徐々に役人数を減少させていった。

延宝5年(1677)には伊川宇右衛門・福山屋次郎右衛門が銀間歩の請負を願い出たという記述があることから、寛文元年(1661)以後、柵内銀山町で行われていた直山支配が停止となっていたのであろう。さらに天和元年(1681)には、4箇所(大坂口、滝口、奥山口、田原口)に設置された口固番所が廃止されたとみられる。

さらに天和2年(1682)、中村杢右衛門が職務不良を理由に追放・切腹となった。以後、代官を銀

山に配置せず、「請山」としての機能を果たすこととなる。それにしたがって、銀山役所での諸業務は銀山役人に任されることとなり、70余村の山々等を支配することとなった。

役所は明治2年(1869)まで残り、銀山町と銀山付村などの鉱山の管理を行った。

第4項 江戸時代における銀山町と周辺の村々との関わり

江戸時代における銀山町と周辺の村々との関わりは、国絵図から読み取ることができる。国絵図は、江戸幕府が慶長、正保、寛永、元禄、天保の5回にわたって各地の主要大名に命じて全国規模で国ごとの地図を作成させたもので、摂津国は寛永を除いた絵図が現在まで伝えられている。

慶長国絵図(西宮市立郷土資料館所蔵)には広根村と長谷村の間に「銀山町」との記載は見られないものの、「銀山谷」と記されており、江戸時代前期にはすでに付近は鉱山として位置づけられていたことがうかがえる。また、道は上野村から広根村を経て長谷村、大原野村へ通じる道が示されている。地形と絵図を比較すると、広根方面から長谷方面に向かうためには銀山地区を通過しなければならないため、慶長国絵図に描かれている「銀山谷」は瓢箪間歩や台所間歩を示していると考えられる。

正保国絵図は2種残されている。国立公文書館所蔵の国絵図には銀山そのものの記載はみられないが、竹田市立図書館所蔵の国絵図には「広根ノ内銀山町」とともに間歩が記されている。

元禄国絵図(国立公文書館所蔵)には、銀山付近に「村上新田村」が一村として登場していることから、正保から元禄年間に新たに一村として加えられたことがわかる。

天保国絵図(国立公文書館所蔵)は元禄国絵図と銀山町付近の描かれ方が類似していることから、元禄国絵図を模写して作成されたものと考えられる。

これら4種の国絵図を比較すると、いずれも広根村から銀山を経由して長谷村へと繋がる道が示されている。

このことから、江戸時代初期以来、広根村から銀山町と長谷村を経由して三田町方面へ道が通じていたことがわかる。また、江戸時代後期には、これらの『摂津国名所大絵図』をはじめとする一般向

表6 多田銀銅山の歴代代官

期 間	代 官	所 属
元和元年(1615)～	長谷川忠兵衛藤継	摂津国代官
寛永2年(1625)～	中村左右衛門之重	京都代官・銀山奉行
天和2年(1682)～	今井七郎兵衛好親	京都代官
天和3年(1683)5月～	万年伝兵衛旨	京都代官
元禄3年(1690)6月～	設楽喜兵衛正秀	京都代官
元禄7年(1694)6月～	長谷川六兵衛安定	京都代官
元禄16年(1703)8月～	古川武兵衛氏成	京都代官
正徳元年(1711)～	古川武兵衛氏成	京都代官
	古川岡右衛門	京都代官
正徳3年(1713)8月～	町野惣右衛門	京都代官
正徳4年(1714)～	鈴木九太夫正当	京都代官
享保6年(1721)8月～	平岡彦兵衛良久	大坂代官
享保14年(1729)9月～	千種清右衛門直豊	大坂代官
寛保元年(1741)～	池田喜八郎季隆	大坂代官
寛保3年(1743)10月～	千種清右衛門	大坂代官
	渡辺民部	大坂代官
寛保3年(1743)11月～	奥谷半四郎直救	大坂代官
寛延2年(1749)～	小川新右衛門盈長	大坂代官
宝暦6年(1756)～	萩原藤七郎友明	大坂代官
宝暦11年(1761)6月	内藤十右衛門	大坂代官
	飯塚伊兵衛英長	大坂代官
宝暦11年(1761)7月～	飯塚伊兵衛英長	大坂代官
明和5年(1768)～	辻六郎左衛門富森	大坂代官
安永7年(1778)～	万年七郎右衛門頼行	大坂代官
天明4年(1784)～	石原清左衛門正範	大津代官
寛政7年(1795)～	石原庄三郎正通	大津代官
文政4年(1821)11月～	石原清左衛門正修	大津代官
天保11年(1840)5月～	高槻藩預かり	
天保14年(1843)5月～	築山茂左衛門	大坂代官
天保15年(1844)2月～	高槻藩預かり	

けの絵図が作成されたが、これらについても国絵図をもとにして作られているようで、大きな差異はみられない。

なお、絵図以外では、銀山地区周辺に残された道標から銀山への交通経路を復元することができ、銀山村を指標とした道標は現在までに、猪名川町内のほか、宝塚市、川西市、能勢町、池田市などで確認されている。これらは、近世において銀山地区がほかの村々と密接に繋がっていたことを示唆している。



図19 銀山付近 [慶長摂津国絵図] (西宮市教育委員会蔵)



図20 銀山付近 [正保摂津国絵図] (国立公文書館蔵)



図21 銀山付近 [正保摂津国絵図] (異本、竹田市立図書館蔵)



図22 銀山付近 [元禄摂津国絵図] (国立公文書館蔵)



図23 銀山付近 [天保摂津国絵図] (国立公文書館蔵)

第5項 文献及び絵図面からみる多田銀銅山

多田銀銅山について示された史料としては、代官所（役所）関連史料が挙げられる。これらの史料は、幕末期の役人秋山良之助によって編纂されたもので、断片的な史料ではあるが、代官所（役所）が設置された寛文2年（1662）～明治2年（1869）までの銀山町や銀山付村での動向を知ることができる。

そのほかに、銀山町の山師や庄屋などの旧家に伝わる文書群や絵図、これらの旧家から渡ったとみられる京都大学総合博物館所蔵などの文書群が知られる。これらの文書群のなかでもとくに重要なものについては、『猪名川町史』第5巻に所収されている。

銀山町を示した江戸時代の絵図としては『銀山町間歩絵図』、『銀山町行政絵図』、『柵内銀山町御用地略絵図』の3種が知られている。『銀山町間歩絵図』は年代こそ不詳であるが、役所施設の描かれ方と間歩の関係から寛文年間以後に作成されたものと推定される。『銀山町行政絵図』は別名を『銀山町検知付近絵図』という。凡例には「見取」と記されていることから、銀山町で検地が行われる延享2年（1745）以前に、幕府が税金を徴収するために作成した銀山町の見取図であると考えられる。

『柵内銀山町御用地略絵図』は幕末の銀山役人秋山良之助が作成したものである。縦帳に描かれたため、位置関係については正確ではなく、代官所の施設が華麗に描かれすぎていること、秋山の在職時にはすでに番所などの施設が廃止されていた点には注意を要する。しかし、役所関連施設や間歩名、銀山町内の地名などの文字情報が多く記されていること、現在の地形と描かれている情報が一致することが確認できることから、看過できない絵図である。なお、部分的ではあるが非常に詳細に描かれている理由として考えられるの



図24 銀山町間歩絵図（町内寺院蔵）



図25 銀山町行政絵図（個人蔵、町指定文化財）



図26 柵内銀山町御用地略絵図（個人蔵）

は、銀山役所、山下役所の両役所に存在した文書目録である。『悉皆目録』には、「寛文3卯年 摂州多田銀山惣絵図 大一枚」とあることから、秋山はこれを実見したうえで作成した可能性が高い。

また、代官所付近を示した江戸時代の絵図として、『摂州川辺郡多田銀山町御役所麓絵図 [天明8年(1788)]』、『摂州川辺郡多田銀山町御役所絵図控 [寛政元年(1789)]』(いずれも京都大学総合博物館所蔵)が現在まで残されている。

第6項 近世鉱山での多田銀銅山の位置付け

世界規模に貿易が拡大した16世紀半ばから100年ほど、銀は貿易の決済の手段として重要なものとなった。日本国内でも盛んに金銀山が開発され、江戸時代初期には世界有数の産銀国となった。

しかし、17世紀後半になると国内での銀生産量は減少しはじめ、江戸幕府は寛文8年(1668)に銀の輸出禁止令を出した。その時期に前後して、多田荘内では銀山町で銀鉱脈が発見され、寛文元年(1661)に銀山町に代官所が設置された。当時、「多田銀山」と呼ばれ、銀生産が減少した石見銀山、生野銀山を抜いて、佐渡銀山と並ぶ日本最大級の銀山となった。一方、足尾銅山では開発の結果、寛文期(1661～)に銅生産が急増し、日本はスウェーデンを抜いて世界最大の産銅国となり、天和期(1681～)からは銅が最大の輸出国となった。

多田銀銅山で産出される鉱石は銅鉱中に銀が含まれている。そのため、製錬では銀を分離する工程として南蛮吹が行われた。寛文期の記録によると、当時産出された銅鉱石中に3%にも達するとされている。元禄元年(1688)、銅改役所(山下役所)の設置以降、銅鉱の採鉱が盛んとなる。その後、18世紀後半から、多田銅山は衰退期に入り、銀銅鉛を生産する小規模鉱山として明治時代を迎えるようになる。



図27 寛政元年(1789) 摂州川辺郡多田銀山町御役所絵図控 (京都大学総合博物館蔵)



図28 天明8年(1788) 摂州川辺郡多田銀山町御役所麓絵図 (京都大学総合博物館蔵)

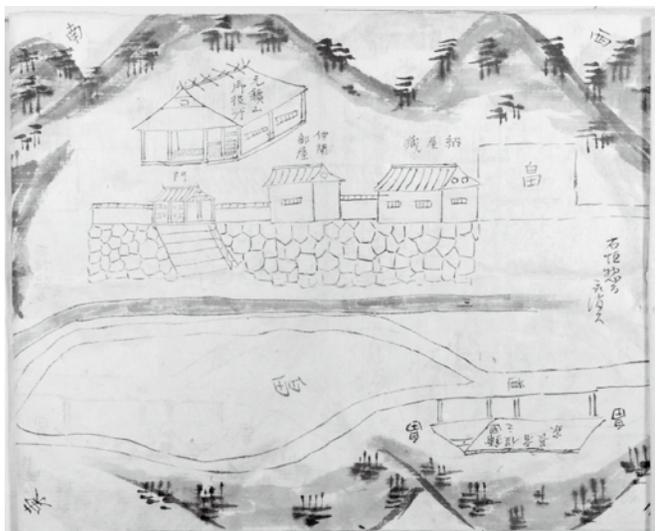


図29 明治6年(1873) 元鉱山役所山下願 (個人蔵)

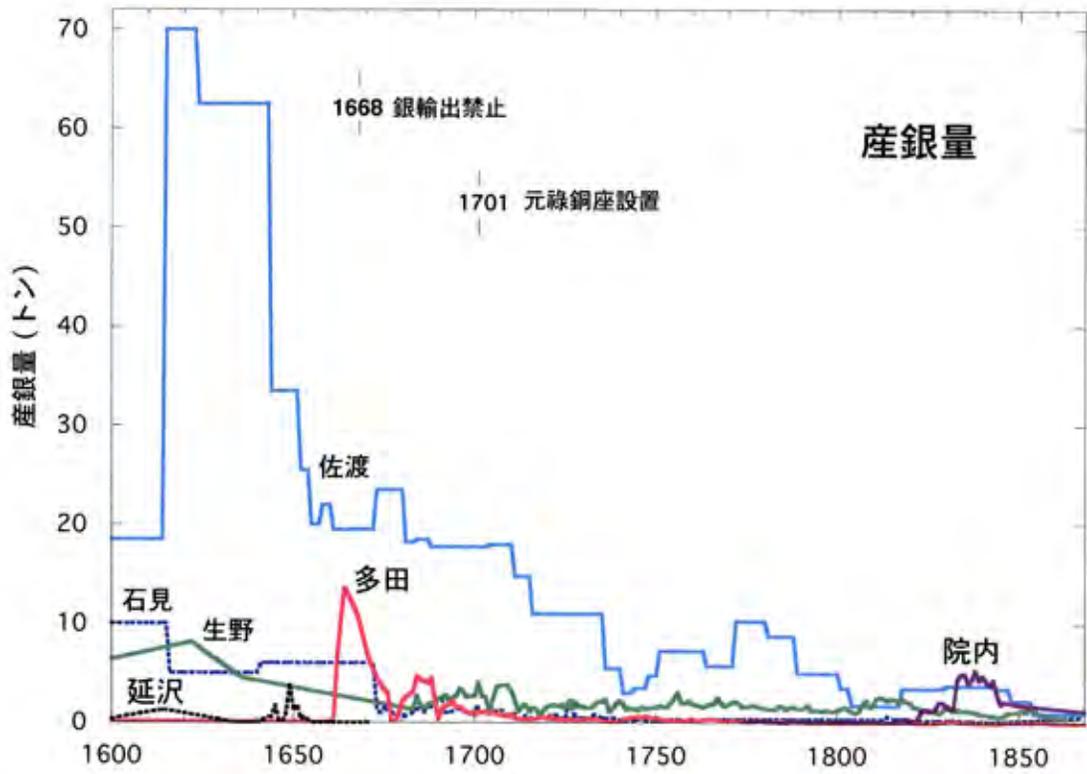


図 30 江戸時代鉱山での産銀量の比較

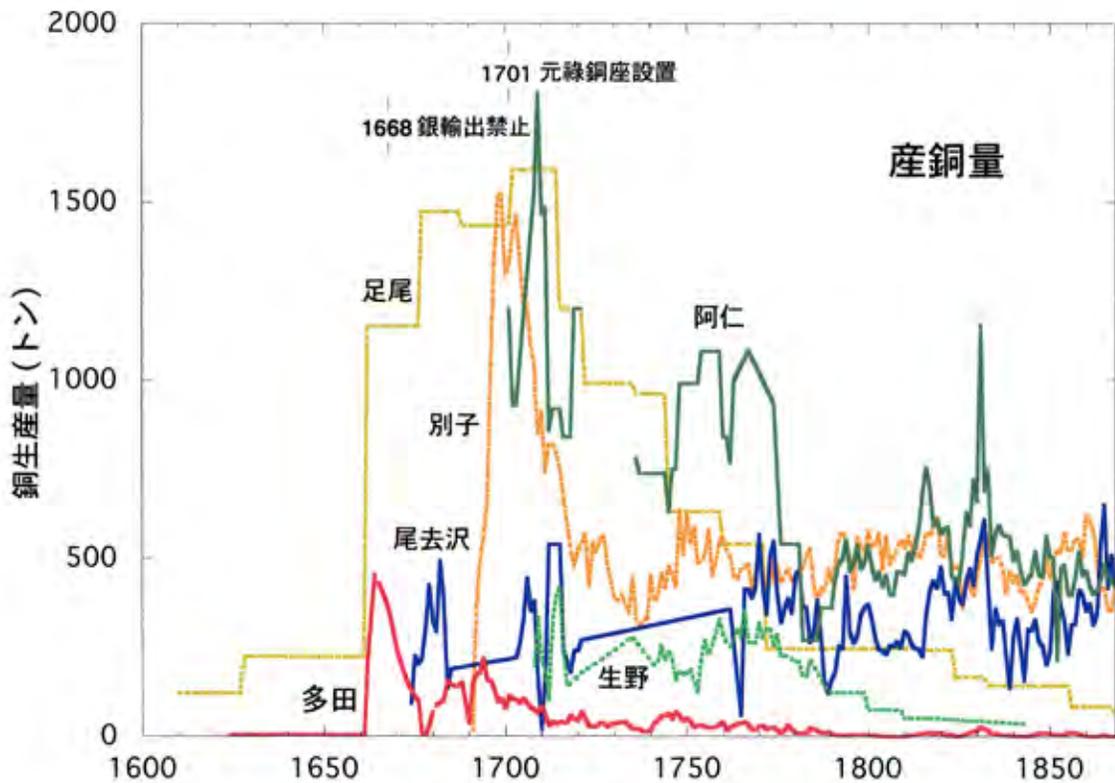


図 31 江戸時代鉱山での産銅量の比較

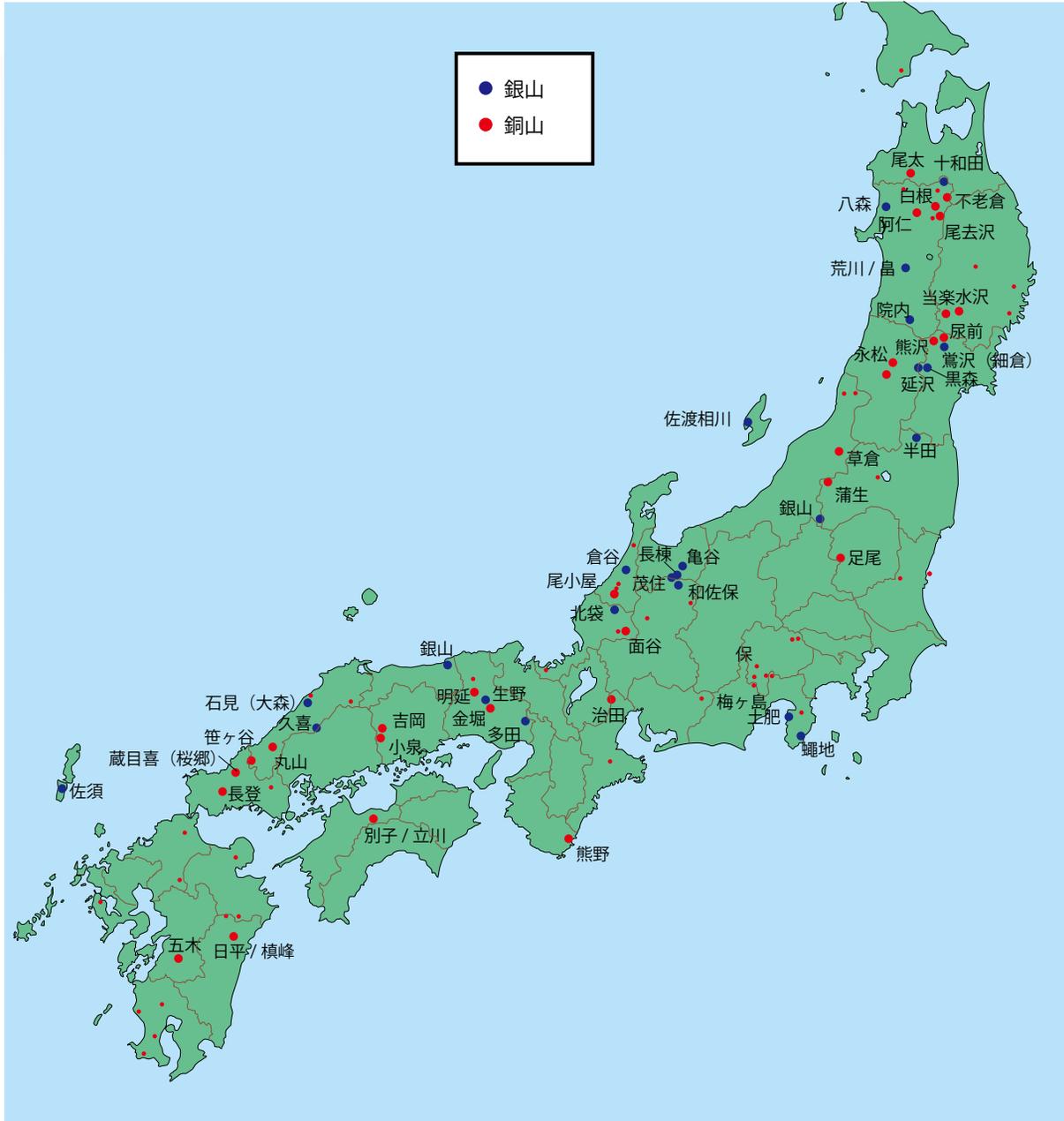
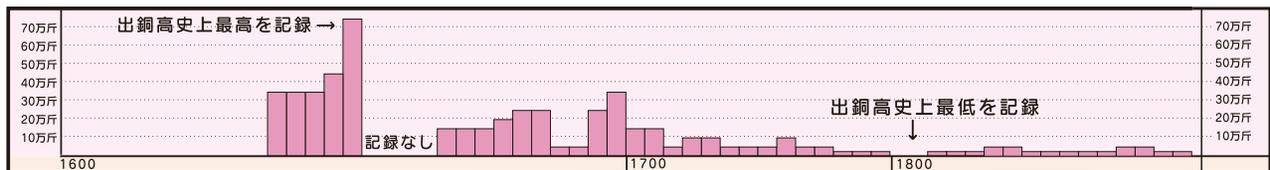


図 32 江戸時代の銀山・銅山



※出来高は、「歳々出銅高書付」(猪名川町史)より作成
 ※寛文2年(1662)～慶応3年(1867)までの記録
 ※1斤は約600g

図 33 多田銀銅山における江戸時代の出銅高の変遷

第2節 指定に至る経緯

第1項 閉山以後一宅地開発計画とゴルフ場計画一

昭和48年（1973）に日本鉱業（株）多田鉱業所が閉鎖され、昭和40年代から猪名川町の南部地域では、ニュータウン開発をはじめとした大規模開発が計画された。

銀山地区に隣接する南田原地内では、昭和53年（1978）に猪名川パークタウン住宅地開発が計画され、その一部が銀山地区にも及んだ。この開発予定地内を郷土史家を中心とした任意団体の「摂津多田銀銅山遺跡調査団」が事前に分布調査を実施したところ、大坂口番所推定地（当時は銀山四軒茶屋遺跡）と銀山窯跡を確認した。

昭和60年代には、銀山新町地区以北でゴルフ場の計画が行われ、事前分布調査を実施した結果、その計画範囲全体で奥山口番所跡、田原口番所候補地とみられる役所関連遺跡、瓢箪・台所間歩群、千石間歩群、玄能間歩群など鉱山に関する生産遺跡とともに村上新田など江戸時代以降の景観が残されていることが判明した。

これらの調査の結果、銀山地区には広く遺構が分布していることが確認されたため、ゴルフ場計画は中止となり、多田銀銅山遺跡を構成する重要な要素として保存された。

第2項 観光資源としての銀山地区の活用計画

（1）多田銀銅山遺跡総合調査

猪名川町では平成7年度まで文化財の専門職員が配置されておらず、それ以前の埋蔵文化財の調査は、引き続き「摂津多田銀銅山遺跡調査団」が実施していた。

「摂津多田銀銅山遺跡調査団」は、昭和55～60年度に財団法人観光資源保護財団（ナショナルトラスト）の援助を受け、また昭和58～59年度には文部省科学研究費を受けて、銀山地区の総合調査を実施した。これらの調査成果は報告書としてまとめられ、昭和59年度に「摂津・多田銀銅山遺跡 その1」、昭和60年度に「摂津・多田銀銅山遺跡 その2」として刊行されている。その1の報告書では銀山地区の遺跡の概要、その2の報告書では遺跡を観光資源として活かすことを目的とした「多田銀山自然歴史村」の提言がなされた。

（2）銀山の宴計画

猪名川町では、平成4年（1992）にジャパンエナジー（前身は日本鉱業（株））から長家前の土地（現在の代官所跡敷地と悠久の館敷地）を買収し、平成5年度には『（仮称）猪名川町・多田銀銅山歴史村整備事業』－「銀山の宴」基本計画書－を刊行し、銀山地区における整備計画を策定した。

基本計画書では①ハイキングコースの整備、②資料館の建設（銀山字本町地内）、③観光坑道の建設（大口坑～念力山～瀬戸谷坑 [青木間歩]）、④駐車場の設置（案1：堀家製錬所跡、案2：長家前 [現 悠久の館敷地] 案3：代官所跡）、⑤看板設置、⑥銀山橋の架け替え、⑦銀山字長谷口（奥山口番所推定地）用地の取得などが策定されたが、それぞれの事業には莫大な費用がかかることから、全体計画については保留となったが、③観光坑道の建設（青木間歩のみに規模縮小）、⑤看板設置、⑥銀山橋の架け替えの実施など、町として実現可能な事業展開を行った。

(3) 文化財保護体制の確立

銀山地区では、「銀山の宴」計画を受け、平成5年度に資料館建設に先立つ事前調査として、本町遺跡の確認調査、平成8・9年度には銀山橋架け替え工事に先立ち、確認調査を実施した。

調査は、猪名川町教育委員会が「摂津多田銀銅山遺跡調査団」に調査委託し、実施した。調査では製錬遺構が検出されるなど、鉱山に関する文化財の存在が明らかになったため、猪名川町としても銀山地区での文化財保護体制を確立する必要性が生じた。

平成8年度には文化財専門職員を配置して、町教育委員会主体での調査を実施できる体制を確立した。

第3項 文化財保護行政、観光資源としての活用計画

猪名川町では、平成11年度に「銀山史跡活用検討会」を設置して、銀山地区での遺跡の活用方法について検討を行った結果、その第1段階として、①青木間歩の整備計画、②代官所跡遺跡の調査および調査委員会の組織化を実施することとなった。

(1) 代官所跡調査（平成12～17年 [2000～2005]）

代官所跡の調査については、「銀山史跡活用検討会」から、調査委員会を組織し、外部の専門家から調査指導を受ける体制を確立するよう兵庫県教育委員会の指導を受けた。これにより、「猪名川町多田銀銅山遺跡調査委員会」を設置し、調査体制を整えたことにより、平成12年度から猪名川町教育委員会が主体となって代官所跡の調査に着手した。

平成12～13年度での調査の結果、代官所跡にて遺構が良好な状態で残存していることが確認された。これを受け、猪名川町教育委員会では平成14年度に「多田銀銅山代官所跡遺跡のまちづくりへの活用について」をまとめ、多田銀銅山代官所跡の活用方法について、提案を行った。その中で、代官所跡を「国史跡」に指定して遺跡の保護を行うとともに多田銀銅山を町内外にアピールして、観光資源として活用する構想を示した。

また同年に、文化庁記念物課調査官による現地視察が行われた際には、代官所跡調査の進捗状況及び将来の遺跡活用構想について説明を行い、対策を具申した結果、国史跡指定を推進するためには、銀山地区全体の調査を行う必要があるとの指導を受けた。

代官所跡調査については建物基礎跡、門跡などが検出された。それらの遺構は明治6年（1873）の絵図と一致し、江戸時代の幕末の役所遺構と判断された。その成果については平成17年度に『多田銀銅山代官所跡遺跡』として報告書にまとめた。

(2) 多田銀銅山遺跡銀山地区の把握（平成15～22年 [2003～2010]）

上記を受け、猪名川町教育委員会では代官所跡調査に引き続き、銀山地区「事前分布調査」を計画し、平成15年度には大手前大学との共同調査で、GISを活用して間歩を中心とした分布調査を実施した。この「事前分布調査」での結果を受けて、猪名川町教育委員会では平成18～22年度にかけて、さらに詳細分布調査を実施した。分布調査では引き続きGISを利用するとともに、絵図との比較作業や現地での図化作業等を行った。

詳細分布調査の結果、地区全体に遺構が良好な状態で残されていることが確認され、これによって、銀山地区での遺跡の構成要素が明らかになり、分類することが可能となった。「詳細分布調査」では、中世～近代にかけて鉱山関係の遺構が数多く残されていることを改めて確認することができ、その成

果を平成22年度に『多田銀銅山遺跡詳細分布調査報告書』にまとめた。

(3) 詳細調査（平成23～26年〔2011～2014〕）

詳細分布調査結果をもとに、銀山地区内には①役所関連遺跡、②生産遺跡、③生活遺跡、④流通遺跡と4つの要素に分類を行った。

多田銀銅山遺跡の価値を明らかにするために、多田銀銅山の価値を構成する①のうち大坂口番所跡（平成23・24年度）、②のうち瓢箪・台所間歩群（平成25年度）、大金間歩群（平成25年度）、本町対岸遺跡（平成24年度）の確認調査や坑道内調査等詳細な調査を実施し、その成果を平成25年度に『多田銀銅山遺跡（銀山地区）詳細調査報告書』にまとめた。

(4) 銀山地区での遺跡活用の取り組み

一方、猪名川町では平成15年度に歴史街道モデル地区の認定を受け、『歴史街道計画整備プラン』を策定した。このプランは「清流に育まれた太閤伝説と木喰の郷創生計画」と発展させ、あわせて展開していた「清流猪名川を取り戻そう町民運動」とともに第2回地域再生計画として内閣府からも認定された。銀山地区では、歴史を学ぶ場の整備として①文化財調査の実施、②銀山資料館の整備、③高札場跡に高札レプリカの設置、④間歩の整備（青木間歩に音声説明機の設置、瓢箪間歩・台所間歩・船間歩の整備）、⑤歴史施設の整備（久徳寺跡の整備、金山彦神社の水抜き口の整備、日本鋳業エレベータ跡の整備）が計画され、さらに観光地の整備として、①近畿自然歩道や旧道（遊歩道）の再整備と駐車場・休憩所の整備、②代官所跡地と川岸を一体化した歴史親水公園の整備により砂金（銀）とりスペースの設置、③製錬所跡地に銀山歴史公園の整備、④案内（標識）看板・トイレの設置、⑤パンフレット掲出など案内スポットの整備が計画された。

平成16年度には『歴史街道計画整備プラン』に基づき、銀山資料館（仮）設置が計画された。この計画を受け、平成18年度までに計画が実施された。平成19年（2007）4月には多田銀銅山悠久の館が開館し、以降年間約2万人が銀山地区を訪れることとなった。その他、ソフト事業への支援施策として、ボランティアガイドの育成が計画され、現在では観光ボランティアガイドの会として町内の史跡、文化財等のガイド活動を行っている。

平成22年度には庁内でのワーキンググループにて「銀山魅力創造プロジェクト」が実施され、今後の銀山地区での活用方法の提言が行われた。その提言のうち、①堀家製錬所跡遺跡の調査、②台所、瓢箪間歩の保坑工事、③銀山地区の道路改修が平成23年度に実施されることとなった。

堀家製錬所跡での確認調査では遺構が確認されたことを受け、遺跡を現地で学習する場として「悠久広場」整備事業が計画され、翌年平成25年（2013）3月に竣工した。

「悠久広場」は明治時代の「堀家製錬所跡」を整地し、ガイダンス施設多田銀銅山悠久の館とともに学習の場としての役割を果たしている。

(5) 国史跡指定への取り組み

平成12年度から国庫補助事業で代官所跡の発掘調査を実施した結果、東西南北に配置された建物遺構が検出された。これらの建物配置は明治6年（1873）に作成された「元鋳山役所払下げ願い」の役所配置と一致していることから、この部分が代官所および役所跡の施設であることが明らかとなった。その結果に基づき、平成19年（2007）3月19日に代官所跡遺跡として町指定史跡となった。

また、平成22年（2010）3月23日には多田銀銅山大露頭が町指定天然記念物、平成24年（2012）

5月23日には金山彦神社本殿が町指定有形文化財（建造物）となった。

平成22年度までに実施された銀山地区詳細分布調査結果に基づき、銀山地区内で特に歴史的に重要な位置をしめると判断された、役所関連遺跡（大坂口番所）、生産遺跡（瓢箪・台所間歩群、大金間歩群、本町遺跡、本町対岸遺跡）、明治時代の遺跡（堀家製錬所跡）の発掘調査等の学術調査を実施した。

調査をすすめていくなかで、学識経験者による学術的な評価や住民の関心が高まっていき、調査と並行して、活用事業を展開した。

平成21年（2009）には猪名川町教育委員会が川西市教育委員会、日本鉱業史研究会と合同で多田銀銅山のシンポジウムを開催し、町内外から多数の参加があった。

猪名川町教育委員会では平成26年度より国庫補助事業で多田銀銅山遺跡の活用事業をはじめ、多田銀銅山悠久の館で企画展を開催し、年度ごとにテーマを設定して展示を行ってきた。

また、開催にあわせて、企画展に関連する内容やこれまでの調査成果について報告する講演会や小

表7-1 銀山地区の過去の計画一覧

年度	計画名称	主体	実施予定期間	基本コンセプト	設定内容	具体的計画
昭和60・61年度 (1985～86)		日本ナショナルトラスト (財団法人観光資源保護財団)		銀山地区を①鉱山遺跡保存②研究・展示③関連産業遺跡の保存と現代的再生の観点で構想を設定。	銀山地区をA遺跡保存再生ゾーン、B集落再生ゾーン、C農業観光ゾーン、D自然活用ゾーンに分けて設定。	A・・・大坂口番所跡、堀家製錬所跡、代官所跡などの遺跡整備 B・・・既存建物を利用した店舗（民芸店、喫茶店、レストラン）、工房（紙、染、陶芸、銀銅細工など）設置 C・・・くり、しいたけ、なし、ぶどう栽培、花ショウブ、ガマ等湿生植物園、昆虫園、アスレチック、小動物園の設置 D・・・もみじ、つつじ、さつき等の花の山、展望スペースの設置 その他駐車場の設置（銀山入口に設置、地区内は進入禁止）
平成4年度 (1992)	(仮称)猪名川町・多田銀銅山歴史村整備事業-『銀山の宴』基本計画書	猪名川町	平成5～12年度	ナショナルトラストの基本計画を受け、『自然と歴史』を基本コンセプトとする。	銀山地区を①推定大坂口番所跡ゾーン②史跡整備ゾーン③観光坑道ゾーン④豊臣家埋蔵文化財ゾーンに分けて計画を設定。	①ハイキングコースの整備、②資料館の建設、③観光坑道の整備、④駐車場の設置、⑤看板設置、⑥銀山橋の架け替え、⑦整備に必要な用地取得

中学生を対象に体験学習会を開催してきた。

町教育委員会が主体となった活用事業を展開していくことと併行し、銀山地区住民も地区内に所在する文化財の保護と活用について銀山自治会が主体となって猪名川町と連携して検討する機会を何度かにわたって設定し、国史跡に向けての機運を高め、第一段階として特に重要である遺跡について土地所有者の同意を経て、平成27年(2015)10月7日に「多田銀銅山遺跡」として面191,442.6㎡が史跡に指定された。



写真13 講演会開催風景

(多田銀銅山の鉱業技術史を探る [平成21年度])

表7-2 銀山地区の過去の計画一覧

年度	計画名称	主体	実施予定期間	基本コンセプト	設定内容	具体的計画
平成15年度 (2003)	平成15年度 歴史街道モデル事業『多田銀山と清流猪名川のまち-猪名川町歴史街道整備プラン-』	猪名川町	平成17～ 20年度	①歴史文化を活かした「住み続けたい・何度も訪れてみたい」地域づくりを進める、②観光客流入による交流人口の増大を地域の新興につなげる。③豊富な自然環境の保全と清流猪名川を取り戻すことを基本的な考え方とする。	歴史街道の基本方針として①地域の資源を活かした観光ゾーンの形成、②観光ゾーンのアクセスの整備・充実、③観光案内情報の整備・充実、④観光産業関連の振興を掲げ、銀山地区については「近畿自然歩道 埋蔵金ロマン多田銀山へのみち」に含まれた。	①歴史を学ぶ場の整備 ・歴史遺産を名実ともに明らかにするための文化財調査の実施 ・銀山資料館の整備 ・高札場跡(銀山橋の袂)に高札レプリカの設置 ・間歩の整備(青木間歩に音声説明機の設置、瓢箪間歩・台所間歩・船間歩の整備) ・歴史施設の整備(久徳寺跡の整備・金山彦神社の水抜き口の整備・日本鉱業エレベータ跡の整備) ②観光地としての整備 ・近畿自然歩道や旧道(遊歩道)の再整備と駐車場・休憩所の整備 ・代官所跡地と川岸を一体化した歴史親水公園の整備により砂金(銀)とりスペースの設置 ・製錬所跡地に銀山歴史公園の整備 ・案内(標識)看板・トイレの設置 ・パンフレット掲出など案内スポットの整備

表8 銀山地区の調査のあゆみ

	年度	調査事業	調査内容等	報告書
多田銀銅山代官所跡発掘調査	12	代官所跡調査(1年目) (国庫補助事業)	遺構が良好に保存されていることを確認 鋤溝、瓦溜まり、焼土、礎石を検出	多田銀銅山代官所跡遺跡調査報告書 猪名川町文化財調査報告書 2
	13	代官所跡調査(2年目) (国庫補助事業)	範囲確認(鋤溝、礎石群、高まり部を検出)	
	14	代官所跡調査(3年目) (国庫補助事業)	代官所建物跡の高まり部の範囲確認 敷地内の遺構分布状況の確認	
	15	代官所跡調査(4年目) (国庫補助事業)	門・階段(納屋蔵・中間部屋)位置確認 分布調査(大手前大学との共同調査)	
	16	代官所跡調査(5年目) (国庫補助事業)	建物跡規模の確認	
	17	代官所跡調査(6年目) (国庫補助事業)	補足調査、調査報告書を刊行	
多田銀銅山遺跡 詳細分布調査	18	詳細分布調査(1年目) (猪名川町単独事業)	銀山地区全体の踏査 旧道を主体とした地区全体の分布調査	多田銀銅山遺跡 詳細分布調査報告書 猪名川町文化財調査報告書 3
	19	詳細分布調査(2年目) (猪名川町単独事業)	旧道について補足調査 地区内の遺跡(遺構)調査カードの作成 大坂口番所跡の平板測量調査実施	
	20	詳細分布調査(3年目) (国庫補助事業1年目)	地区内の遺跡(遺構)詳細分布調査 遺構詳細スケッチ図の作成	
	21	詳細分布調査(4年目) (国庫補助事業2年目)	地区内の遺跡(遺構)、間歩分布調査 田原口番所候補地Aの確認調査	
	22	詳細分布調査(5年目) (国庫補助3年目)	金山彦神社(建造物)の調査 H18～23年度分布調査報告書を作成・刊行	
多田銀銅山遺跡 詳細調査	23	詳細調査(1年目) 役所関連遺跡の調査 (国庫補助事業4年目)	大坂口番所跡の確認調査 堀家製錬所跡の確認調査	多田銀銅山遺跡(銀山地区) 詳細調査報告書 猪名川町文化財調査報告書 5
	24	詳細調査(2年目) 役所関連遺跡の調査 生産遺跡の調査 (国庫補助事業5年目)	大坂口番所跡の確認調査 本町対岸遺跡の詳細調査	
	25	詳細調査(3年目) 生産遺跡の調査 報告書作成 (国庫補助事業6年目)	大金間歩群の詳細調査 瓢箪間歩の詳細調査 H23～25年度詳細調査報告書作成・刊行	

表9 国史跡指定までの主な多田銀銅山活用事業

年度	内容
20	歴史まつり(多田銀銅山遺跡調査成果パネル展示)
21	講演会 多田銀銅山の鉱業技術史をさぐる(川西市教育委員会、日本鉱業史研究会と共催)
26	多田銀銅山悠久の館で企画展開催(平成26年度～)